

コーパスと英語教育語彙表における基本色彩語の考察

——BNC, JEFLL Corpus, CEFR(-J) を用いて——

内田 富男

1. 色と基本色彩語

太古の昔から人類は色彩に深い関心を持ってきた。人間は自然現象としての色 (color) と彩 (hue) と共に生きてきたと言っても過言ではない。色彩は人間の文化に計り知れない影響を与えており、芸術作品から若者のサブカルチャーに至るまで万人の関心事である。そして、デジタル化時代の到来は、色彩の次元を拡大し、色彩への関心を加速させ、色彩の世界を豊かにしたと言えよう。

現代まで脈々と続く色彩研究史を紐解き、紀元前のギリシャ時代まで遡れば、後のゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe 1749 - 1832) に影響を及ぼしたとも言われるアリストテレス (Aristotle BC 384 - BC 322) の古典的色彩学を見出すことができる。また、ゲーテと同じ18世紀には古典的自然科学としての色彩学においてニュートン (Isaac Newton 1642 - 1727) の名を見ることになる。20世紀に入り、近代科学においては文化人類学や言語学、心理学、生理学、工学等幅広い分野・領域で学術的テーマとして取り上げられることになる。

言語学や文化人類学、心理学の分野では、普遍主義・相対主義それぞれの立場から、色と文化や言語の関係に関する議論が展開されている。言語学の関心は色のラベリング、すなわち色彩語¹⁾であり、個別言語における色彩語や言語間の差異に関する研究等²⁾が見られる。代表的なものには言語相対論のサピア & ウォーフ仮説に基づく考察³⁾や普遍主義を主張する文化人類学者のバーリン (Berlin, B.) と言語学者のケイ (Key, P.) による Basic Color Terms の研究⁴⁾がある。また、心理学分野では色彩語の習得、とりわけ母語における色彩語の獲得に関する研究⁵⁾は少なくない。しかし、第2言語を対象とした色彩語習得の研究 (例 Corbeil2005) は少ない。

BCT 仮説：基本色彩語 (Basic Color Terms)

近年の色彩語研究における普遍主義の代表は前述の B. バーリンと P. ケイによる BCT 仮説⁶⁾と言えよう。Basic Color Terms: Their Universality and Evolution (Berlin & Key 1969) は今日の色彩語研究に大きな影響を与え、この分野における基本文献となっている。同書によると、バーリンらはおよそ100種類の個別言語を対象に色彩語についてインフォーマント調査を実施した。その結果、1) 言語によって色彩語の数は異なり、2) その色彩語に

対応する色の範囲は異なる、3) 言語の進化によって次第に基本色が分化し、11 語まで増える。これを彼らは基本色彩語 (Basic Color Terms、BCT) と呼んだ。BCT の進化パターンには一定の法則があり、以下のように7段階で進化する (2-3 頁)。

1. white と black は全ての言語にある。(All languages contain terms for black and white.)
2. 色彩語が3つなら、red がある。(If a language contains three terms, then it contains a term for red.)
3. 色彩語が4つなら、green または yellow がある。(If a language contains four terms, then it contains a term for either green or yellow, but not both.)
4. 色彩語が5つなら、green と yellow がある。(If a language contains five terms, then it contains terms for both green and yellow.)
5. 色彩語が6つなら、blue がある。(If a language contains six terms, then it contains a term for blue.)
6. 色彩語が7つなら、brown がある (If a language contains seven terms, then it contains a term for brown.)
7. 色彩語が8つ以上なら、purple、pink、orange、gray か、それらのうちどれかを組み合わせさせた色がある。(If a language contains eight or more terms, then it contains a term for purple, pink, orange, and/or gray.)

これを図式化すると図1のようにまとめることができる。色彩語の進化の第1段階では2語 (WHITE、BLACK) で、あらゆる個別言語にはこの2語がある。第2段階で RED が加わり、3語になる。第3段階では4語になるが、この段階では言語により揺れ (GREEN または YELLOW) が生じる。第4段階から第6段階では、5語から6語へと1語ずつ増えて行く。従って、6段階目の7語 (WHITE、BLACK、RED、GREEN、YELLOW、BLUE、BROWN) に関しては色彩語の普遍性が顕著に表れている。揺れは第7段階でも観察される (PURPLE/PINK/ORANGE/GRAY)。しかも、この段階では8色から11色と言語により語数が異なる。図1では大文字で示した語が進化に従って新たに加わる色彩語である。

# of Colors	1st stage (2 terms)	2nd stage (3 terms)	3rd stage (4 terms)	4th stage (5 terms)	5th stage (6 terms)	6th stage (7 terms)	7th stage (8 -11 terms)
1	WHITE	white	white	white	white	white	white
2	BLACK	black	black	black	black	black	black
3		RED	red	red	red	red	red
4			GREEN /YELLOW	green yellow	green yellow	green yellow	green yellow
5					BLUE	blue	blue
6						BROWN	brown
7							PURPLE/PINK
8-11							ORANGE/GRAY

図1 色彩語の進化パターン

2. コーパスと基本色彩語

本節では、コーパスにおける基本色彩語とその使用頻度について論じる。まず、現代英語コーパスにおける色彩語に関する先行研究を見よう。O’Keeffe, McCarthy & Carter (2007) では、500万語規模の話し言葉コーパス（主にUK英語）である *The Cambridge and Nottingham Corpus of Discourse in English* (CANCODE) と50万語の話し言葉コーパス（北米英語）である *The Cambridge Cornell Corpus of Spoken North American English* (North Am sp) の例（同書）の例が紹介されている。他にも、百万語の書き言葉（UK英語）を収集した均衡コーパス *The Lancaster - Oslo/Bergen (LOB) Corpus* を用いた例 (Johansson & Hofland 1989, Hardin & Maffi 1997) 等がある。

これらの研究結果を表1にまとめた。色彩語の出現頻度順の第1位、第2位は white、black のいずれかで、前述の BCT 仮説における第1段階の2語である。同仮説における第2段階に新たに加わる red は4種類全ての英語コーパスにおいて第3位であり、ここまではコーパス頻度と BCT 仮説が合致している。ところが、コーパスの頻度順位の4番目は blue または yellow となっており、yellow は合致するが、blue が高頻度である点は BCT 仮説とは異なっている。第5位、第6位は green、brown、blue、gre(a)y、yellow のいずれかである。第9位は pink のみで、第10位、第11位は purple、orange のいずれかである。第9位から第11位の語は BCT 仮説と一致する。このように部分的には違いがあるものの、3種類のコーパスにおける頻度上位11語とインフォーマント調査の11語が全く同じ色彩語である点は、調査方法が異なるにも関わらず一致している点は興味深い結果と言える。

表1：色彩語のコーパス間頻度順位比較

コーパス名	頻 度 順				
	1、2位	3位	4位～8位	9位	10、11位
CONCODE	black-white	red	blue-green-yellow-brown-grey	pink	purple-orange
North Am sp	white-black	red	blue-brown-green-yellow-gray	pink	orange-purple
LOB	white-black	red	green-blue-yellow-grey-brown	pink	purple-orange

The British National Corpus における基本色彩語

現在、公開されている現代英語コーパスの中で、最も広く活用されている The British National Corpus (BNC) に出現する色彩語を独自に調査したところ、BNC 全体における色彩語の高頻度語を順に並べると以下の通りになる。

black-white-red-green-blue-brown-grey-yellow-pink-orange-purple

この結果と上記の先行研究と比較すると、BNC の頻度順が完全に一致するものはないが、BNC においても頻度上位11語の色彩語は同じ BCT11色である。また、グループ毎に見ると3つのコーパス並びに BNC における頻度順は一致する。すなわち、1、2位グループは black/white、3位は red、4～8位のグループは green/blue/brown/grey/yellow、9位は pink、10位、11位は orange/purple となっている。

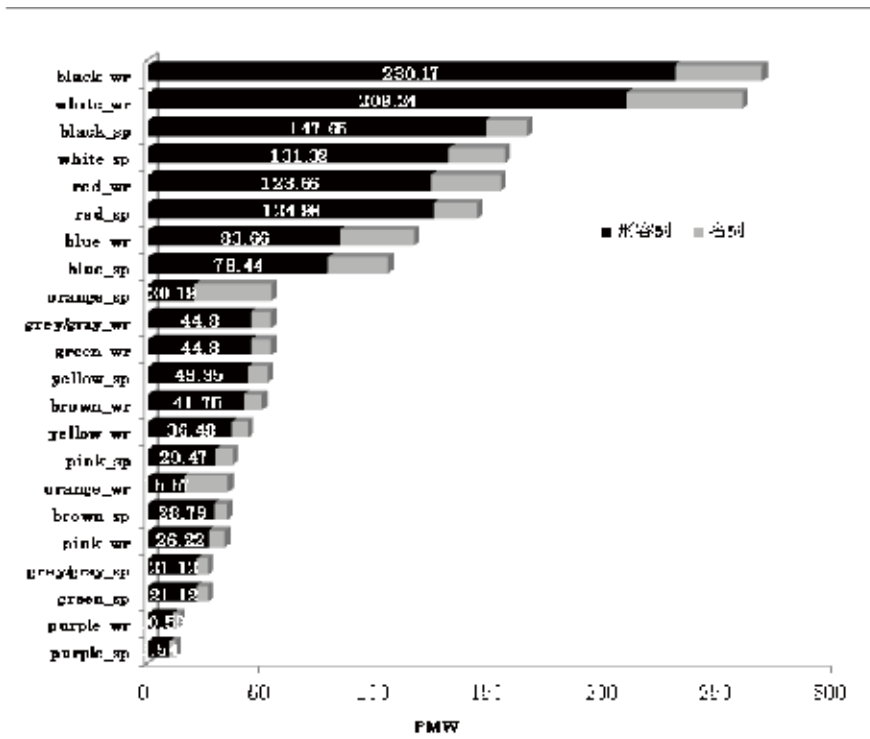


図2 BCT11語の品詞別頻度(百万語当り)

書き言葉・話し言葉の違いを視野に入れて、それぞれのサブコーパスを観察する(図2)。百万語当たりの頻度(per million words, PMW)で、第1位の色彩語(blackまたはwhite)は書き言葉(wr)において突出しているのが分かる。BTC3語は話し言葉(sp)に比べ、書き言葉の方が高頻度である。BNCにおける品詞別頻度(形容詞・名詞)は書き言葉、話し言葉のいずれのサブコーパスにおいてもBCT3語についてはblack、white、redの順で、圧倒的に形容詞の方が高頻度である。同様の傾向はbrown、green、purpleでも観察される。一方、yellow、pink、orangeについては逆転し、話し言葉の方が高頻度である。orangeのみ構成率が他の全ての色彩語と違い、いずれのサブコーパスにおいても名詞⁷⁾としての出現率が高い。これは柑橘類の果物のオレンジ(orange)、飲み物(orange juice/drink)、色彩名詞として複数の語義を持つ多義語であるというorangeの特徴に起因するだろう。本研究では調査しないが、他の色彩語についても同様の現象が起こるのか、否かについては、次節で述べる教育語彙表に関する議論において重要性を帯びてくる。

3. 英語教育語彙表における色彩語 : CEFR EVP & CEFR-J Wordlist

CEFR と CEFR-J

コーパスを活用した英語教育語彙表におけるBCTを見る。本論では、近年、注目されているCEFRと日本独自のCEFR-Jを使って色彩語の語彙レベルについて述べる。まず、

CEFR 及び CEFR-J の概要を紹介する。CEFR とは Common European Framework of Reference の略で、ヨーロッパ共通参照枠と訳される。Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (2001, CUP) の邦訳版(吉島・大橋訳)によれば、CEFR の目的は「ヨーロッパの言語教育のシラバス、カリキュラムのガイドライン、試験、教科書、等々の向上のために一般的基盤を与えること」である。CEFR は「言語学習者が言語をコミュニケーションのために使用するためには何を学ぶ必要があるか、効果的に行動できるようになるためには、どんな知識と技能を身につければよいかを総合的に記述する」とされている。CEFR の特徴は、「学習者の熟達度のレベルを明示的に記述し、それぞれの学習段階で、また生涯を通して学習進度が測れるように考えてある」とも述べられている。

こうした言語(外国語)教育における「一般的基盤」を示す CEFR の考え方は、アジア諸国においても広まりつつある。しかし、CEFR は Common European Framework of Reference の名が示すようにヨーロッパにおける共通参照枠であり、必ずしもアジアにおける共通枠、あるいは一般的基準としてそのまま取り入れることは難しい。日本においても CEFR の考え方が紹介され、日本での文脈化の過程においては、日本の現状を踏まえた「一般的基盤」の必要性が議論されるようになった。そして、日本での導入、適用を視野に入れた CEFR 研究が多く時間を、人員、費用等を使って進められており、昨年、CEFR-J という日本版といえる CEFR が誕生するに至った。その成果は、『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』(投野由紀夫編 2013) という形でまとめられ、CEFR の考え方に基づく日本型の「一般的基盤」が一般に示されることとなった。

English Vocabulary Profile と CEFR-J Wordlist における BCT

ヨーロッパの CEFR、日本の CEFR-J にはそれぞれに英語教育語彙表があり、CEFR の場合は *English Vocabulary Profile* (EVP) と呼ばれる語彙表が、CEFR-J では *CEFR-J Wordlist* (CJWL と略記) が提示されている。両者は共に、学習段階に応じた語彙をレベル毎に示しているリストだが、それぞれは開発のプロセスが全く異なる。前者は主に英語学習者が使用した発信語彙のプロフィールであり、後者は、アジア諸国の教科書コーパスから受容語彙を中心にリスト化している(投野 2013)。

EVP では、A1 レベル(最下位)から C2 レベル(最上位)まで 6 段階のレベルが語彙(語とフレーズ)に付与されている。6 段階全ての項目総数は 10,508 語で、その内訳は A1 レベルでは 566 項目、A2 で 1,164 項目、A レベルの累計で 1,730 項目となっている。B1 レベルは 2,157 項目、B2 レベルは 2,971 項目で、A1 から B2 までの累積総数は 6,858 項目となっている。投野(2013)によれば、日本人英語学習者のほとんどが B レベル以下である。よって本研究の対象とはしないが参考まで C2 までの累計総数は 10,508 項目である。また、後述のように EVP ではレベル分けは語義毎になっており、同一語であっても語義によって異なるレベルに分類される場合がある。そのため実際の異なり語数は 1 万強となる。

一方、CEFR-J の語彙表である CJWL は B レベルまでしかない。その項目総数は 7,822 項目で、最下位である A レベルは 2,581 項目(内訳: A2 1,416, 1,165 A1)である。そして BCT 11 語は全て A レベルの語に分類されている。そこで、EVP と CJWL における

基本色彩語の検討へと議論を進めよう。

EVP・CJWLにおけるレベルと語義別基本色彩語

本節では、EVP及びCJWLにおける基本色彩語とその品詞、レベル⁸⁾について順に述べる。EVPでは語義別に見ると、BCT11語はA1からC2まで幅広く分布している。一方、上述のようにCJWLでは、BCT11語は全てAレベル(A1・A2)に含まれる。

EVPにおけるBCTの品詞とレベル付け

black: 一般的な色彩形容詞の単語としてはA1だが、*black people*におけるblackはA2に分類される。名詞としてはA2である。

white: レベル分けは複雑で、一般的な色彩形容詞の単語としてのみA1で、色彩名詞及び*white coffee*におけるwhiteではA2とされる。形容詞で*white person*におけるwhiteはB1である。

red: 一般的な色彩形容詞の単語としてはA1だが、*red wine/hair*におけるredはA2で、*go red*の動詞コロケーションではredはB2である。色彩名詞としてはA2である。

blue: 一般的な色彩形容詞の単語としてはA1に、色彩名詞としてはA2に分類される。また複合形容詞としてnavy-blueがB1に、pale-blueがA2にリストされている。なお、*turn blue*というフレーズにおけるblueがB2に登場する。

green: 一般的な色彩形容詞の単語としてはA1で、色彩名詞としてはA2である。grassの意味でB1に、environmentでB2に登場する。複合形容詞のpale-greenがA2にある。

yellow: 一般的な色彩形容詞の単語としてはA1で、色彩名詞としてはA2である。pale-yellowも、pale-blueやpale-greenと同様にA2である。

grey(gray): 一般的な色彩形容詞の単語としてはA1、色彩名詞としてはA2である。フレーズに使われる*go grey*のgreyはB2、*grey weather*のgreyはB1である。

brown: 一般的な色彩形容詞の単語としてはA1、色彩名詞ではA2である。

orange: 色彩形容詞A1、色彩名詞はA2である。

pink/purple: 色彩形容詞、色彩名詞共にA2である。

なお、上記のように、BCT仮説における第5段階の7語については特定のフレーズにおける色彩語の語義によるレベル付けがなされているが、brown、orange、pink、purpleの4語、すなわち、BCT仮説における第6段階以降の語については見当たらない。

CEFR-J WordlistにおけるBCTの品詞とレベル付け

CJWLで、A1のカテゴリーに分類されるBCTはblack、white、blue、yellow、grey(gray)で、全て色彩形容詞か名詞である。orangeについても共にA1だが、CJWLにおいて名詞にのみ付与されている「概念カテゴリー」は‘food and drink’となっており、EVPと同様に、A1のorangeは果物あるいは飲み物のオレンジである。これは色彩名詞ではなく物質名詞として分類される。red、green、brown、pinkは色彩形容詞としてはA1だが、色彩名詞と

しては A2 である。purple は逆に A2 では色彩形容詞で、A1 では色彩名詞となっている。

4. 日本人英語学習者コーパスに出現する BCT

前節では、英語母語話者コーパスにおける BCT の使用頻度について検討した。本節では、日本人学習者コーパスにおける BCT の使用状況について述べる⁹⁾。コーパスは、日本人中高生 1 万人分の自由英作文データを収集した JEFLL Corpus (投野 2007) である。収集された英語データは、国内の学校で英語を学習した日本人中学・高校生であるので、入門から初中級といったレベルである。本調査で使用した JEFLL Corpus は一般に無償公開されている小学館コーパスネットワーク (SCN) 日本語版である。同コーパスのウェブ検索ツールの語句検索・品詞検索・共起検索の 3 機能を使って、コーパス全体とトピック、学年区分に基づく 2 段階のグループ、すなわち、中学群: 中 1 (J1) と 中 2 (J2) 高校群: 高 2 (S2) と 高 3 (S3)、における対象語を観察し、それぞれの特徴について比較した。分析の観点は、BCT11 語とその頻度、及び、単独語 (*black, white* 等)、複合形容詞 (例 *blue green, dark blue* 等)、色彩語を含む名詞句及び語彙コロケーション (*blue sky, white color* 等) と複合名詞 (*Snow White, green tea* 等) である。

まず、JEFLL コーパス全体を見渡すと、white、green、black、red、orange、blue の 6 語が高頻度である (図 3-1)。しかし、実際のデータを目視で確認したところ green は green tea という複合名詞で用いられているケースがほとんどで、しかも「朝食」という特定のサブコーパスに偏っていることが分かった。orange も同様に、果物の orange がほとんどである。従って、下のようにこの 2 語 (括弧内に示した語) についてはフィルタリングの必要があると考え、本調査では対象から除外し、最終的な分析対象は 9 項目とした (太字で示した語)。

white-black-red-(green 除外)-**yellow-blue-brown-brown-purple-pink-**(orange 除外)-grey

green と orange の 2 語を除く、9 語 (図 3-2) の出現率の順位を見ると、以下のようになり、white、black、red、blue の 4 語が特に高頻度に使用されているが、他の 5 語は 5% 未満の出現率で極めて低頻度であることが分かった。

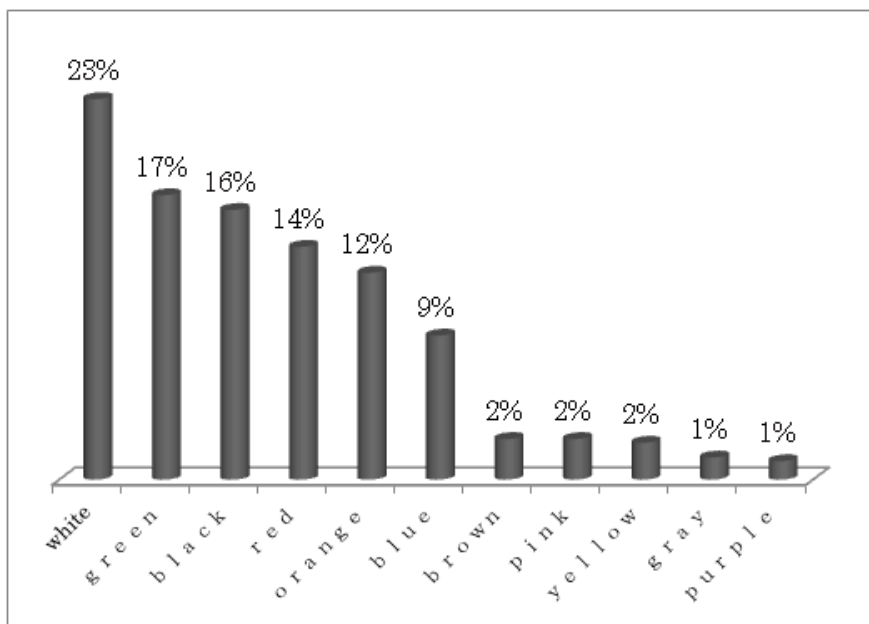


図3-1 BCT11語の出現率

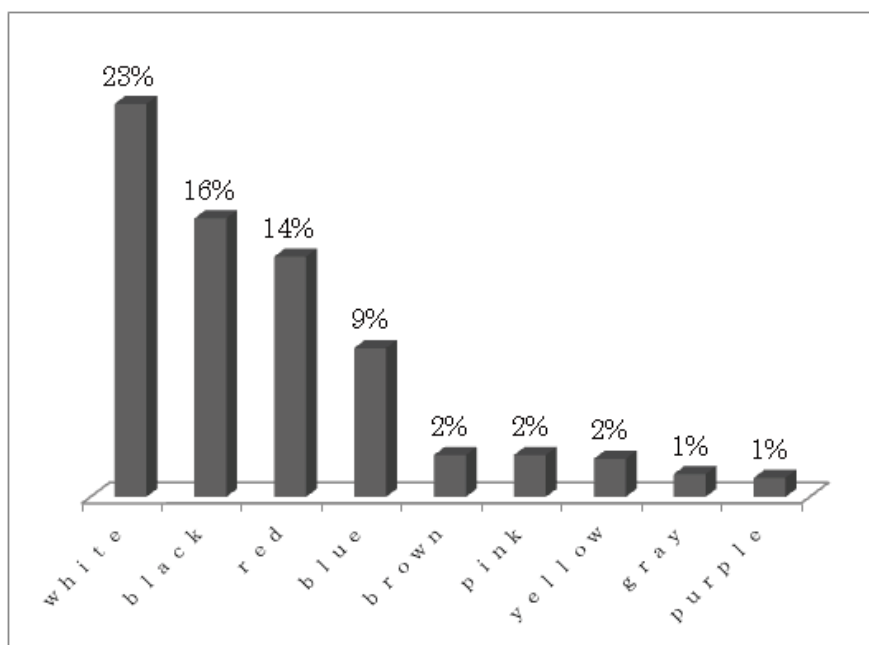


図3-2 BCT9語の出現率

トピックによる BCT の違い

話題が異なれば使われる色彩語も異なることがあるだろう。JEFLL Corpus では日本人中高生にとって身近な6つのトピック¹⁰⁾の作文が収集されている。色彩語の使用においてトピックによる違いが観察される場合もあると考え、トピックの違いによる BCT の出現率の差異に注目した。

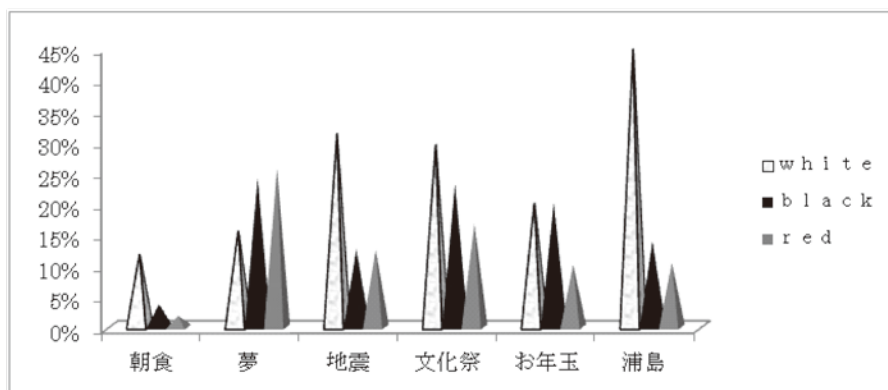


図4 BCT 3語のトピック別出現率

図4を見ると、出現率が突出しているのは「浦島」における white である。用例を確認すると、white hair(白髪)であり、浦島太郎が白髪になる件を考えれば頻度は高くなるだろう。このケースではトピックの影響が現れていると言える。次に目を引くのが、「夢」における red であろう。他の2つの色彩語は構成率に差があるものの、順位は white、black、red の順である。ところが「夢」では、3語の順位が逆転し、red、black、white の順になっている。そこで、文脈を見ながらその原因を探るべく、red の共起語を抽出したところ、blood と共起するケースが多いことが分かった。blood という語に red という血液の属性に関する情報が内包されていることを考えれば自然だろう。なお、「夢」のトピックに blood が多用されている点は内容的には興味深い。一方、black の出現率の高さはトピックが「夢」であることを考えれば妥当と言えよう。最後に、「朝食」では全体的に色彩語の使用は少ない。その中で white が際立っているのは、white rice(白米)という複合名詞の多用に起因する。このように、色彩語の使用は書き手が属する文化の特性(日本人の食生活)や書くトピック(朝食)の影響を受ける場合とそうでない場合があることが示唆される。

次に、BCT3語(white、black、red)及び green、orange を除いた BCT 6語(blue、brown、pink、yellow、grey、purple)の使用状況を見よう(図5)。まず、BCT 6語全てが出現するのは「文化祭」のみで、それ以外のトピックでは5種から2種の色彩語である。特に、「朝食」は yellow、blue の2色しか出現しない。トピック内の割合を見ると、「地震」と「朝食」を除けば、blue の出現率が高い。「お年玉」では gray が目立つようだが、色彩数が少ない(4色)。

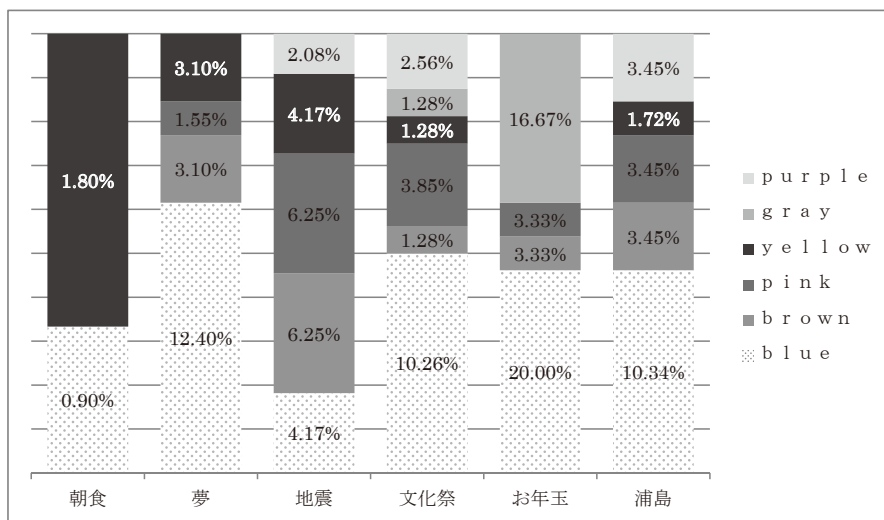


図5 BCT6語のトピック別出現率(除く、green、orange)

学年による BCT11 語の違い

ここで学習段階別、中学群(J1、J2)と高校群(S2、S3)、におけるBCTの出現率に着目する。まず、出現率上位の語は white、black、red の3語である。そして、BTC Top 3の順位に注目すると、中学群は white、red、black の順だが、高校群は white、black、red の順になっている。white(中:20% 高:25%)、black(中12% 高:15%) の出現率については5%あるいは3%の差だが、black(中:7% 高:19%) のみ12%の差が観察された。中学群では black が相対的に低頻度であるため、高校群のように色彩語が基本から離れるにつれて漸減する傾向は見られない(図6-1)。

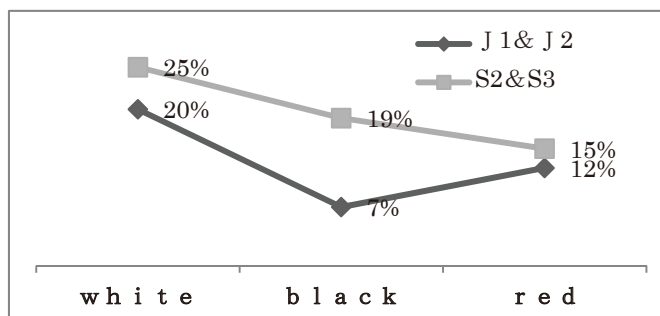


図6-1 BCT 3の出現率の群間比較

最後に、出現率10%程度以下の6語(blue, yellow, brown, pink, gray, purple)について見る(図6-2)。まず、最も目を引くのは blue である。BCT 仮説では、blue は第5段階で加わるトップ6語の一つである。対象語6語の中では、中学群(郡内出現率:11% / 件数:13)では突出しており、高校群(郡内出現率:6% / 件数:10)でも高い。他は僅かな頻度であるが、purple の1例を除けば高校群においても他の5語より出現率が高い。ただし、こ

の6語はコーパス全体における頻度が低く、計量的に検討する十分な資料とは言えないため詳細な質的分析が必要である。

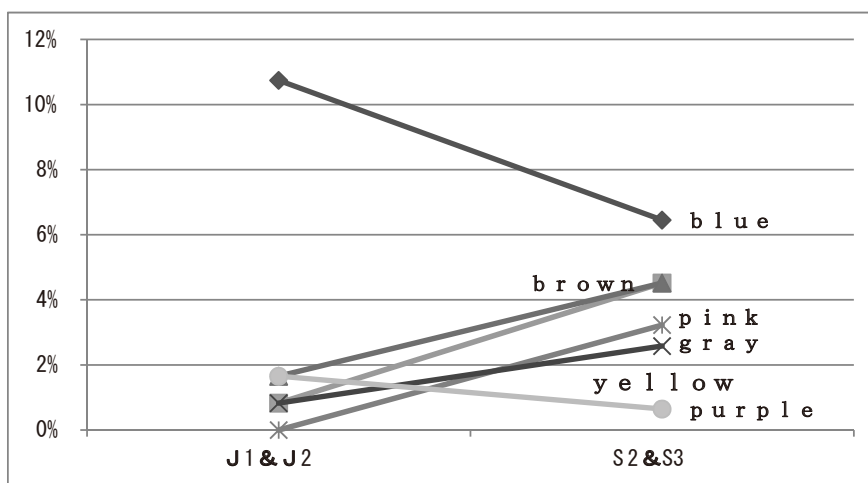


図6-2 構成率の段階別比較 (基本6色彩語)

5. 考察

本稿では、バーリン&ケイによるBCT仮説に従って、英語母語話者コーパスと日本人英語学習者コーパス、2種類の教育語彙表における基本色彩語について検討した。その結果、BCT仮説における基本色彩語の進化パターンとコーパスにおける頻度は基本的な色彩語については二者の関連性が高いが、学習者コーパスではトピックにより使われる色彩語は異なる場合があり、その影響の度合いは不安定であることが分かった。BCT仮説における第7段階レベルの色彩語は、コーパスにより異なり、これはBCT仮説におけるインフォーマント調査において言語によりばらつきが見られたことと同じ現象である。

BCT仮説における第2段階以降の語の順位について、JEFLL Corpusと類似しているのはThe Cambridge Cornell Corpus of Spoken North American Englishであった。JEFLL Corpusは作文データだが、日本人中高生が書いた英語であるので話し言葉の特徴に近いと言えるのかも入れない。また、注目したい点はpinkがJEFLL Corpusで他のコーパスよりも高順位だということである。他の4種類のコーパスでは、全てにおいて第9位だが、JEFLL Corpusでは第7位である。これはpinkに相当する日本語は「桃色」あるいは「ピンク」だが、ピンクという英語借用語の方が一般的になっていることが原因と考えられる。日本人英語学習者における英語借用語の影響(Uchida 2011)を視野に入れることも必要性が示唆される。Stanlaw(1997)の調査においても、高校生データでは、桃色は0例で、ピンクのみであった。ピンク(pink)はbuilt-in lexicon(Daulton 2008)の一部であるため使用頻度に影響すると考えられる。

なお、前述のように、本研究では学習者コーパスの分析においてgreenとorangeについてはフィルタリングの必要性があるとしたため、この2語は順位には含まない。従って、この2語の位置によって順位が一部変わる可能性がある。

North Amsp : red-blue-brown-(green)-yellow-gray-pink-(orange)-purple
JEFLL Corpus : red-blue-brown-pink-yellow-grey-purple

品詞別に BCT を見ると、2つの教育語彙表では基本的には色彩形容詞は A1レベルに、色彩名詞は A2レベルに分類されている。また、JEFLL Corpus における使用状況も品詞別ではこれらの分類に概ね合致している。教育語彙表の比較においては、EVP のように語義と品詞によってレベルを決めるアプローチが必要であることが示唆される。

今後の研究課題として、BCT 3語以降を中心にコーパスデータの質的分析が不可欠である。特に、EVP における品詞別・語義別レベル分けと日本人学習者の使用状況を質的に検証することで、EVP の適用可能性を検討することができよう。また、本研究で十分に扱うことができなかった色彩語を含むコロケーションエラーの分析へと研究対象の範囲を拡張することも必要である。さらには、語彙発達の観点から、他の学習者コーパスを用いた中級・上級学習者との比較検証も重要である。加えて比喩表現、イディオム、コロケーション、副詞と色彩形容詞 (e.g. completely white) 等も興味深いテーマとなるだろう。

*本研究は、科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「日本人英語学習者の形容詞コロケーションはなぜ不自然なのか」(研究代表者 内田富男) 研究課題番号: 25370704 2013年～2016年の研究成果の一部である。

注

1. 色彩のラベルについては色彩語以外にも、色名、色彩語彙、色彩表現といった言葉もある。英語では、clo(u)r word, colo(u)r vocabulary, colo(u)r terminology, colo(u)r term, colo(u)r lexicon といった用語が使われる。本稿では、直接引用を除き、日本語の場合は「色彩語」とし、英語では“color term”を一貫して用いる。特に、基本色彩語 (Berlin & Kay 1969) については、バーリン&ケイに従って、BCT(Basic Color Terms)と表記する。また、基本色彩語のうち最も基本的な3色彩語 (white, black, red) を「BCT 3語」、全11色彩語を「BCT 11語」と表記する。
2. 鈴木 (1978)、Davies (1998)、Dedrick(1998)、須賀川 (1999) 等
3. Whorf, B. L. (1964)、Kay& McDaniel(1978)、Kay & Kempton(1984)、Kay&Maffi (1999) 等
4. Berlin & Kay (1969)
5. 英語:Bornstein(1985)、Davies (1998)、Pitchford& Mullen (2002,2005)、日本語: Saito (1996)、Goto (2006)、藤村 (2011) 等
6. BCT 仮説についてケイ自身等による一部修正 (Kay & Maffi 1999) や反論もある (Wierzbicka 2006、Pitchford& Mullen 2006) がここでは触れない。また、本稿では BCT 仮説としたが、BCT モデルや BCT 理論とする文献もある。
7. 色彩語は品詞とその機能の観点から見ると、形容詞と考えられる場合と名詞と考えられる場合、さらには、色彩語を含む複合語のようにいずれの機能を果たすのか明確にすることができない場合もある。また、文脈によって品詞機能の解釈が困難な場合もある。
8. 本研究の対象は CEFR における B レベル以下であるため C レベルの項目は除外した。
9. 調査は、次の口頭発表をもとに、修正し、さらに研究を発展させてさせたものであり、基本3色彩語の検証等の内容の一部は重複するが、本稿のために新たな調査結果を示してある。内田富男. (2013). 「JEFLL Corpus に見られる基本色彩語の考察—色彩形容詞を中心に—」 英語コーパス学会東支部大会 成城大学、東京、2013年3月9日

10. JEFLLCorpus プロジェクトで使用されたタスクの概要とトピックは以下の通りである。
- ・ Tasks for data collection : 20 minute in-class essay, No dictionary use, No preparation in advance, No homework, Students are allowed to use L1 whenever difficult to put ideas in English.
 - ・ Topics and rubrics
 - 1) *Urashima*: The essay task is to guess what happened to Urashima afterwards.
 - 2) *Rice or Bread?* : Which do you prefer, rice or bread for breakfast? Why?
 - 3) *Festival* : Tell us about your school festival.
 - 4) *Earthquake* : What are you going to take with you when a major earthquake hits your area? Why?
 - 5) *Otoshidama* : The task is "What do you want to buy if you have 100,000 yen for Otoshidama?"
 - 6) *Bad Dreams* : What is your worst dream that you have ever had? Tell us the story.
- (Task description of the JEFLL Corpus. http://jeffl.corpuscobo.net/task_desc.html より一部抜粋)

参考文献

- Berlin, B. & Kay, P. (1969). *Basic Color Terms: Their universality and evolution*. CA: University of California Press.
- Bornstein, M. H. (1985). On the development of color naming in young children: Data and theory. *Brain and Language*, 26(1), 72–93.
- Corbeil, G. (2005). Effectiveness of focus-on-forms instruction: Different outcomes on constrained- and free-production tasks? *Canadian Journal of Applied Linguistics*, 8(1), 27-45.
- Corbett, G. G. & Davies, I. R. L. (1997). Establishing basic color terms: Measures and techniques, In C. L. Hardin & L. Maffi. *Color Categories in Thought and Language* (pp. 197-223). Cambridge: Cambridge University Press.
- Daulton, F. E. (2008). *Japan's Built-in Lexicon of English-based loanwords*. UK: Multilingual Matters.
- Davies, I. R. L. (1998). A study of colour grouping in three languages: A test of the linguistic relativity hypothesis. *British Journal Of Psychology*, 89(3), 433-452.
- Dedrick, D. (1998). *Naming the Rainbow: Colour language, colour science, and culture*. Netherlands: Kluwer Academic Publishers.
- Goto, Y. (2006). The acquisition order of color words by Japanese children: Linkage with color preference and input frequency. BAAL –IRAAL Conference, University College Cork, IRELAND.
- Kay, P. & Kempton, W. (1984). What is the Sapir-Whorf-hypothesis? *American Anthropologist*, 86, 65-79.
- Kay, P. & McDaniel, C. K. (1978). The linguistic significance of meanings of basic color terms. *Language* 54 (3), 610–646.
- Kay, P. & Maffi, L. (1999). Color appearance and the emergence and evolution of basic color lexicons. *American Anthropologist*, 101(4), 743–760. doi:10.1525/aa.1999.101.4.743. JSTOR 684051
- O'keeffe, A., McCarthy, M. & Carter, R. (2007). *From corpus to classroom: Language use and language teaching*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Pitchford, N. J. and Mullen, K. T. (2002). Is the acquisition of basic-colour terms in young children constrained? *Perception*, 31, 1349-1370.
- Pitchford, N. J. & Mullen, K. T. (2006). The developmental acquisition of basic colour terms. In N. J. Pitchford & C. P. Biggam. (Eds.). *Progress in colour studies: Volume II Psychological aspects* (pp. 139–158). Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

- Saito, M. (1996). Comparative studies on color preference in Japan and other Asian regions, with special emphasis on the preference for white. *Color Research and Application*, 21(1), 1996, 35-49.
- Stanlaw, J. (1997). Two observations on culture contact and the Japanese color nomenclature system. In C.L. Hardin & L. Maffi. *Color categories in thought and language* (pp.240-260). Cambridge: Cambridge University Press.
- Uchida, T. (2011 August). Loanwords in bilingual dictionaries: A study of examples in beginning-level English-Japanese dictionaries. Paper presented at the AsiaLex International Conference. Kyoto Terra, Kyoto, Japan.
- Wierzbicka, A. (2006). The Semantics of colour: A new paradigm. In N.J. Pitchford & C.P. Biggam (Eds.). *Progress in colour studies: Volume II Language and culture* (pp.1-24). Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Whorf, B.L. (1964). *Language, thought and reality*. Cambridge MA: MIT Press.
- 近江源太郎. (2008). 色の名前に心を読む: 色名学入門. 東京: 研究社.
- 須賀川誠三. (1999). 英語色彩語の意味と比喩: 歴史的研究. 東京: 成美堂.
- 鈴木孝夫. (1978). 虹の色は何色か. 慶応義塾大学言語文化研究所紀要, 10, 107-128.
- 投野由紀夫編著. (2007). 日本人中高生一万人の英語コーパス: 中高生が書く英文の実態とその分析. 東京: 小学館.
- 投野由紀夫編. (2013). CAN-DOリスト作成・活用 英語到達度指標CEFR-Jガイドブック 東京: 大修館.
- 吉島茂・大橋理枝訳. (2004). 外国語教育Ⅱ外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. 東京: 朝日出版.

参照 URL

- NetAdvance. (2003). *British National Corpus*. 小学館コーパスネットワーク / The British National Corpus Consortium. <http://bnc.jkn21.com/>
- English Profile. (2012). *English Vocabulary Profile*. Cambridge: Cambridge University Press. Retrieved from <http://www.englishprofile.org/index.php/resources/wordlists/free-subscription>
- NetAdvance. (2014). *The JEFLL Corpus*. 小学館コーパスネットワーク. Retrieved from <http://scn.jkn21.com/~jefll04/cgi-bin/login1jf.cgi>